

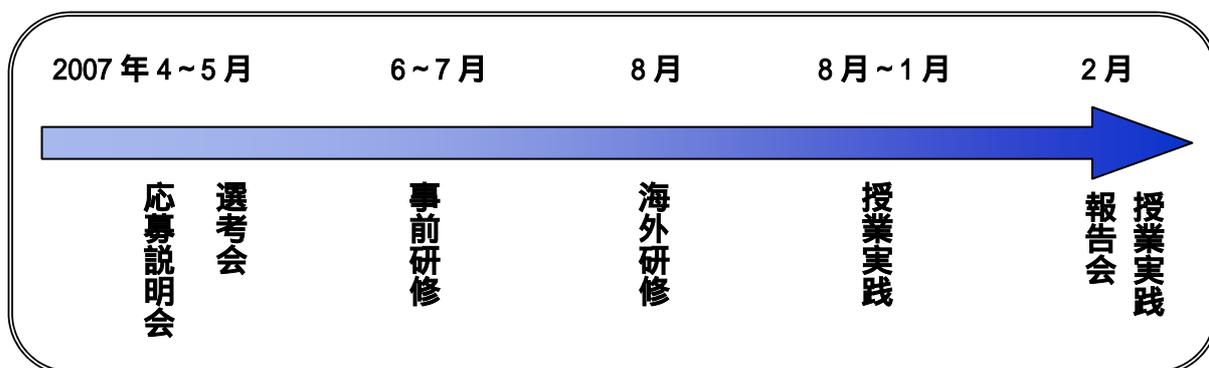
1 . 教師海外研修とは

1-1 教師海外研修の主旨

2002年4月から「総合的な学習の時間」が本格導入されました。JICAは、総合的な学習の時間での取組みが期待される様々な国との関係や異文化理解について、今までに培った経験や人材・ネットワークを活用し、開発教育支援事業の一環として、教育現場に積極的に協力しています。

本研修は、国際協力に関心があり、授業やクラブ活動などで国際理解教育や開発教育を実践している小学校・中学校・高等学校の教員を対象に、開発途上国で国際協力の現場を視察し、今後の授業に役立ててもらうことを目的とした研修プログラムです。

1-2 教師海外研修の流れ



1-3 2007年度 JICA 兵庫実施の海外研修について

(1) 派遣国概要

国名：インドネシア共和国

(Republic of Indonesia)

首都：ジャカルタ

面積：190万5000km² (日本の約5倍)

人口：2億2,278万人 (世界第4位)

民族：ジャワ族・スンダ族など27種族

言語：インドネシア語

(その他250以上の地域言語)

宗教：イスラム教 (約90%) ほか

独立：1945年8月17日



(2) 研修日程

第 1 回教師海外事前研修：2007 年 7 月 2 日（月） JICA 兵庫にて実施

- 目的： 研修後に「総合的な学習」などを利用して、開発教育（国際理解教育）へ取り組む際の考え方や具体的手法について学ぶ。
研修後の情報交換に役立つ参加教員間のネットワーク作りを促進する。
参加者間の親睦を図り、現地での視察のポイントや注意点を確認することで、海外での研修をより実り多いものとする。
- 研修項目： 教師海外研修事業説明
オリエンテーション（渡航上の諸注意、海外旅行保険）
研修国事情
過去の参加者による報告/授業実践
参加型ワークショップ

第 2 回教師海外事前研修：2007 年 7 月 31 日（火） JICA 兵庫にて実施

- 目的： 帰国後の授業実践をより実りあるものにするために、海外研修における目的の再確認をする。
海外研修において渡航上の注意点などの最終確認及び現地での視察のポイントや注意点を再確認する。
- 研修項目： 海外研修について（出発まで、帰国後の流れ、現地での活動目標設定）
渡航上の注意（安全、健康、非常時の対策）
ワークショップ「より実りある帰国後の授業実践にむけて」

多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー：

2007 年 8 月 9 日（木）、10 日（金） JICA 兵庫にて実施

- 目的： 学校現場において児童・生徒が自分自身で考えるワークショップの手法を体験するとともに、経験豊富な講師陣から教室ですぐに使えるアレンジ法の紹介や指導案を組み立てるための情報や資料の提供を行なう。
(一般参加者 100 人と共に、本研修参加者も参加した。)

研修項目 次ページ参照

- 参加者の声
- ・ 教師海外研修で撮ってきた写真をどのように使うか、現地で実際に感じたことや子どもたちに伝えたいことなど、授業を行うための手法の勉強になった。
 - ・ 複数のワークショップを実際に体験し、教材や資料をその場で購入できて良かった。
 - ・ 講師や他の参加者とのつながりができた。

8/9(木)

13:00-14:30 基調講演

「共に生き、共に学ぶ」秦 辰也さん(シャンティ国際ボランティア会専務理事)

カンボジア難民の救援活動をきっかけに、NGOスタッフとしてタイ、ラオス、アフガニスタンなど各国で国際協力を続けてこられた講師より、ご自身の経験と日本のNGOの歩み、そして国際理解教育、開発教育の必要性についてお話しいただきます。

14:40-16:10 セッション

a. 「これ、かわいいい」から「選ぶからにはこれ！」へ	b. 地球にやさしいって、どういうこと？	c. 「豊かに共生する心」をはぐくむ
桑原 英文さん (ECC社会貢献センターアドバイザー) 衣服、食べ物、テレビの番組、本など私たちは普段からいろいろなものを自分の尺度や都合で選んで生活しています。選ぶとき、そこに「社会」の視点が入ると、どうなるのでしょうか？身近なもの、遭遇する場面で考えてみましょう。	荒川 共生さん (アジアボランティアセンター職員) 最近バイオエネルギーの原料としても注目され始めたパーム油。植物由来の油として「地球にやさしい」というイメージがあります。でも実際はどうなのでしょう。パーム油をめぐる課題と私たちのつながりを考えるワークショップです。	樋口 正和さん (子ども多文化共生センター指導主事) 県内の子ども多文化共生教育にかかる現状と課題を理解するとともに、どうすればすべての児童・生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむことができるのか、ワークショップをとおして、ともに考えます。

16:20-17:00

まとめの時間 初日の学びや、教育現場での実践を分かち合う。

8/10(金)

13:00-14:30 セッション

a. 「食べるものが足りません」をどうしよう	b. わたしが難民になったら	c. 写真をつかった授業の効果的な授業手法 「何を伝える？」
藤野 達也さん (PHD協会職員) 国際協力と名がつけば、何でもいいことなのでしょうか。せっかくの気持ちや協力がちゃんと役立っているのか、誰のために行われているのか、私にできることは何だろうかなどについて、皆さんで考えるケーススタディ。	中尾 秀一さん (難民事業本部関西支部職員) 兵庫県は全国で2番目に多くの難民が住む県です。難民とはどんな人のことか。なぜ難民になってしまうのか。どんな生活を強いられているのか。難民の発生から帰還までをシミュレーションしながら、難民問題について考えます。	堀田 直揮さん (社団法人青年海外協力協会職員) 写真を単純に見せるだけでは、生徒の関心をひくことにはつながらない場合もあります。ここでは、写真をつかって児童生徒たちが自発的に考え、写真を読み解く中から気づきや発見につなげる手法を学びます。

14:40-16:10 セッション

a. 楽しく学ぶ防災・リサイクル	b. ポーポキ、平和ってなに色？	c. 「貿易」から学ぶこと
永田 宏和さん (iop都市文化創造研究所代表) 使わなくなったおもちゃやアクセサリー、絵本などを交換するシステム「かえっこバザール」と防災訓練を組み合わせ、国際協力や世界の問題を「楽しみながら知恵や技を伝える」体験型のワークショップキャラバンの手法を学びます。	ロニー・アレキサンダーさん (神戸大学大学院国際協力研究科教授) 平和について問いかける猫のポーポキの絵本を出発点に、創作活動などを通して一人一人が自分自身の五感で「平和」をとらえ、「平和」という言葉の多面性と豊かさ、大切さを実感しながら、実際の自分と社会の平和につないでいくワーク。	山中 信幸さん (柳学園中学・高等学校教諭) 「貿易ゲーム」を体験することにより、先進国と途上国の経済的あるいは社会的な格差をはじめとする国際社会の問題について考えます。またその解決の方途についても考えましょう。

16:20-17:00

クロージング・セッション 2日間のセミナーを振り返り、明日からの実践にどう活かすのか考える。

海外研修日程表

2007年 月 日	曜	日 程	宿泊地
8月1日	水	JICA 兵庫 関西空港発 シンガポール経由 ジャカルタ着	ジャカルタ
8月2日	木	JICA インドネシア事務所訪問 / オリエンテーション	
		タンジュンプリオク港緊急改修プロジェクト視察 ストリートチルドレン施設 (JICA-NGO デスク) Setia Kawan Raharja Foundation 訪問	
8月3日	金	市民社会の参加によるコミュニティー開発技術協力プロ ジェクト (JICA-NGO デスク) Bina Suwadaya 視察	
		生物学研究センター (JICA 技術協力プロジェクト) 訪問	
		夕食会 (JICA 関係者との意見交換会)	
8月4日	土	ジャカルタ ジョグジャカルタ	ジョグジャカルタ
		ポロブトゥール遺跡観光	
8月5日	日	京都大学東南アジア研究所の活動先 (ジョグジャカルタ 特別州バントゥル県ゲシアン村) 訪問・交流・日本文化紹介	
		同村にてホームビジット (昼食交流)	
8月6日	月	デボック郡第5公立中学校 (青年海外協力隊員・理数科 教師活動現場) 訪問	
		マルチメディア訓練センター 訓練機材整備プロジェクト視察	
8月7日	火	ジャワ島中部地震復旧復興支援の現場訪問	
		午後 自由時間	
		夕食会 (青年海外協力隊員 7 人との意見交換会)	
8月8日	水	ジョグジャカルタ ジャカルタ	機中泊
		JICA インドネシア事務所帰国報告会	
		書店・文房具店	
		ジャカルタ発 シンガポール経由	
8月9日	金	関西空港着 JICA 兵庫	
		JICA 兵庫主催「多文化共生のための国際理解教育・開発 教育セミナー」に参加	

視察 = 施設を見学した。

訪問 = 施設を見学し、文化交流や意見交換を行った。

本研修では毎年ホームステイ (宿泊あり) を実施しているが、本年度は派遣国インドネシアの治安事情により、ホームステイの代わりにホームビジット (宿泊なし) を実施した。

1-4 海外研修訪問先



JICA インドネシア事務所訪問 / オリエンテーション

最初に JICA インドネシア事務所を訪問し、所長・次長からインドネシア国の概要、国際協力、教育事情などについて詳しく説明を受けました。その後、私たち(本研修参加者のこと。以下同様。)は、教師海外研修での抱負を述べました。

<参加者の感想>

・インドネシアは途上国の中では開発が進んでいる方であり、このまま進めば援助が必要なくなることが分かった。少し自分の抱いていたイメージとは違った。街並みも(都市だからか)とても整然としていてビルも多く発展していると感じた。後で分かったが、地方と都市で差が激しい。環境に対しては非常に意識が薄いらしい。



タンジュンプリオク港緊急リハビリ事業 (航路拡幅、港湾敷地道路改良)視察

日本の国際協力が現地でどのように実施されているか、ODA(政府開発援助)の円借款プロジェクトであるジャカルタ国際ターミナルコンテナターミナルを視察しました。

<参加者の感想>

・「貿易港」であり、これからインドネシアの貿易の窓口になるであろう、重要な場所だった。かなりのお金や期待がかけられているように感じられた。



ペーパー・リサイクル技法を通してのストリートチルドレンのエンパワメント(仮訳)

Setia Kawan Raharja Foundation 訪問

地元NGOと共同して実施しているストリートチルドレンの自立支援の現場を訪問しました。元ストリートチルドレンの子どもたちと直接交流し、社会観や人生観など色々な話を聞くことができました。

<参加者の感想>

・路上で生活することもたちに寝る場所と仕事を斡旋している施設。9歳~17歳の子たちが生活している。しかし、みんな陽気で明るく歓迎してくれた。楽しみはと質問すると、皆と一緒に何かをすることだとのこと。仲間との結束が強いことを感じた。しかし、特に金銭的な面で将来に対する不安を皆が抱えていた。



CEP・Bina Suwadaya PAHALA コミュニティーグループ (環境関連の市民社会の参加によるコミュニティー開発 技術協力)の視察

地元NGOと共同して実施している環境問題対策の現場を訪問しました。開発されたカッピングマシンを使って、草木を細かく細断してリサイクルがされていました。その後RT15という村に行き、ゴミを堆肥にする現場を見せてもらいました。

<参加者の感想>

・一番大切なことは、皆の考え方が変わることであり、様々なルールや習慣があってもそれを守らなければ意味がないし、自分の考え方しっかり持つことが大切である。
・ゴミ処理など環境対策が遅れているインドネシアにて、家庭ゴミの再生をJICA支援のもとで行っている村を訪問できてよかった。

生物学研究センターの標本管理体制及び生物多様性保全のための研究機能向上プロジェクト(JICA 技術協力)訪問



東南アジアにおいて、一番のコレクション数を誇っている生物多様性センターを訪問し、プロジェクトで働くJICA 専門家の小林専門家や福岡専門家から説明を受けました。インドネシアの生物を後世に残すという意味では、長期的なビジョンで意義のあることだと感じました。南国のフルーツを実際に切って試食させてもらいました。

<参加者の感想>

- ・インドネシアには、世界の 20%もの野性動植物が生息しており、熱帯雨林の貴重な世界有数の生物多様性を有している。日本から多額の資金援助をしたり、研究者が日本の大学で学んだりして、日本の援助がここまで及んでいることに驚いた。センターをインドネシアの学生や市民に開放して、広く活用できるようにして欲しい。日本にもないような施設で、素晴らしい研究者がいる一方、保全活動への住民参加活動がまだまだだということがわかった。
- ・日本が資金援助を行い、インドネシアに国際的な規模の生物研究所を開発するという計画。様々な標本や資料が多数あり、中でもシーラカンスの標本を見られたことはとても感動した。

夕食会(JICA 関係者との意見交換会)



現地で国際協力に従事する小林専門家や福岡専門家、JICA 事務所の水野次長、ナショナルスタッフのエリンさんから活動や生活を通して感じたインドネシアという国や、人々の姿、社会や文化について聞き、日本との色々な違いや特徴を教えてくださいました。

<参加者の感想>

- ・活動には結果が常に求められるが、JICA の活動は成果が目に見えないことも多く、隊員は自分の思いと結果主義のなかで活動しなければならない。

ボロブドゥール遺跡観光(ODAプロジェクト)



世界遺産であるボロブドゥール遺跡を見学しました。間近に見る世界遺産の雄大さに感動しました。

<参加者の感想>

- ・頂上からの景色は心を洗われるようだった。どのようにして作られたかは不明だが、高度な技術と多くの人の願いが込められていたことが伺えた。新しく修復した石には彫刻をしないというところが、反対に建造物に対する礼儀なのかもしれないと感じた。

京都大学東南アジア研究所の活動先(ジョグジャカルタ特別州パントゥル県ゲシアン村)を訪問・交流・日本文化紹介

NGO概要 被災時の緊急集会場は基本的には「モスク」であり、モスクがない場所には集会場がない。そういった問題をクリアするために京都大学大学院東南アジア研究科が実施研究している「ブカランガン」の中の施設を訪問した。ここでは被災時の集合場所としてのみならず、常に紙芝居や人形劇を用いた防災教育・子どもたちの絵画展示などを行っている。(ブカランガン=ジャワ島の屋敷林のこと。熱帯地域では、様々な樹木作物とともに、草本作物も栽培される。日本の屋敷林に完全に対応する用語はないが、ホームガーデン homegarden(屋敷畑)という用語が広く知られている。とくにインドネシアジャワ島のそれは、農家の住居を取り囲むように樹木が植えられており、まさに屋敷林そのものといえる。)



よさこいソーラン、剣玉、こま、竹とんぼ、なわとび、折り紙、書道などの日本文化紹介を通して、インドネシアの文化・習慣等を理解し、現地の人々との交流することができました。

<参加者の感想>

- ・ソーラン節の踊りで子供たちやその保護者の心をガッチリと掴んだ。その後の日本文化紹介や遊びも有意義に進んだ。国際理解は自らで自らの殻を叩き割って真の自分の姿を見せることで人間同士の交流が実現できる。
- ・日本文化の紹介は、楽しいひと時でした。子供たちが、こまや剣玉に向きになっている様子は日本と変わらない風景でした。暑いので外で遊びたがらないのも日本と変わらない様子で驚いた。小学校の生徒の数が自分の学校と同じくらいだったので、文通等を含めてこれからも交流を続けていきたいと思った。



同村でのホームビジット(昼食交流)

実際に家庭を訪問させていただきました。何種類もお料理と、親族みんなのおもてなしを受け、感激しました。一緒に子どもと遊んだことも楽しかったです！

<参加者の感想>

- ・朝から準備してくれ、私たちが待っていてくれたことに感激した。お客さんとして大切にしてくれた。
- ・親族のつながりを強く感じた。家族、人を大切にしている。家族写真もたくさん自慢げに見せてくれた。
- ・お茶をたてたり、浴衣を着せてあげたり、習字をしたり、折り紙をしたりして日本文化を紹介できたこともよかった。



デボック郡第五公立中学校

(青年海外協力隊員理数科教師活動現場)訪問

私たちが訪問して、南中ソーランを披露するととても喜んでくれ、一緒にインドネシアダンスの輪の中に入れてくれました。授業がつぶれて喜ぶところは、日本の中学生と同じです。

<参加者の感想>

- ・教師に制服があり、教室には必ず大統領と副大統領の写真があることに驚いた。
- ・休み時間におやつを買ったり、ピアス・指輪・携帯電話がOKであったりするのは、自由だと思った。
- ・教師は絶対的な存在だと聞いたが、なめられている先生もいた。



インドネシア国マルチメディア訓練センター

訓練機材整備プロジェクト視察

途上国であるインドネシアでは機材の方が早く、技術が追いついていかないそうで、そのあたりでもどかしさを感じていました。60%以上の家庭がテレビを持っているそうです。

<参加者の感想>

- ・震災の多い国であるため、震災緊急連絡が必要であるが東西に長い国ということもあり、なかなか全体まで浸透しないということに、その国なりの問題があると感じた。
- ・放送に興味を持っていることは、どこでも同じだと思った。



ジャワ島中部地震復旧復興支援現場訪問

地震で脊髄を損傷しながらもリハビリに励み、学校に戻り仕事に励むシアンさん。震災からずっと一人でテント暮らしをしているサルシエルさん。お二人から貴重なお話を伺い、本当の支援について考えました。

<参加者の感想>

- ・シアンさんの強い精神力に感動した。原動力として「家族、仲間の存在」と挙げたことに人のつながりを大切にする国民性を感じた。
- ・シアンさんとは逆に、家族とのつながりが薄い人は、インドネシアで生活していくのはつらいだろうと思った。入院をすることもできないなど独りの人に対しての国の取り組みが遅れている。
- ・本当の支援は一時的なものではなく、自立支援であると分かった。



自由時間

それぞれでタクシーに乗って買い物に行ったり、屋台で昼食をとったり自由な時を過ごしました。スーパーマーケットのお買い物は楽しかったです！「HALAL マーク」(イスラム教徒の多いインドネシアでは豚肉を一切用いていないことを表す表示は大切)のついたお菓子を買って、日本の子どもたちに見せ、食しました。

<参加者の感想>

- ・服は安かった！アクセサリーも安いけれど、初めは随分ふっかかけられた。特に露店で売っているものは値段があてないようなもの。
- ・食品は種類が思ったより多かった。
- ・町には、人力タクシー(ベチャ)がたくさん走っていた。



夕食会(青年海外協力隊員との意見交換会)

看護師さん、料理を教えている先生、理数科の先生などから興味深いお話を聞かせてもらいました。インドネシア料理も満喫して、最後のボリュームたっぷりのデザートまでいただき、大満足でした。楽しい話、苦労話、いろいろ本音を語っていただきました。

<参加者の感想>

- ・看護師さんの「私たちが帰ったらどうするのかと心配な独り暮らしの人々がいる。」という言葉に精神的に果たして役割も大きいのだと感じた。
- ・理科の先生は「学校の中での自分の立場」というものに悩んでいたようだったが、日にちが経つにつれそれが明確になり、とてもやりやすくなったと言っていた。



JICA インドネシア事務所 / 帰国報告会

ちょうど選挙が終わったところで、インドネシアの諸事情を聞かせてもらいました。私たちの報告をするとともに、8日間では分からない部分のことをたくさん教えていただきました。「母子手帳」などJICAの事業として全国に定着したもの(こと)が数多くあることにも気づきました。



スーパーマーケット訪問

インドネシアでの最後の買い物ということで、買い残のないようにいろいろ見てまわりました。でも、食料品をみんな一番多く買っていたような気がしました。

<参加者の感想>

- ・日本の数年前のデパートという感じだった。

1-5 参加者リスト（敬称略、兵庫県教育委員会、小学校、中学校、高等学校の種別内で五十音順）

	氏名	勤務先（学校名）	担当教科
1	古角 美之	兵庫県教育委員会事務局人権教育課	子ども多文化共生教育
2	岸岡 歩	西宮市立神原小学校	
3	日下部 望	西宮市立甲陽園小学校	
4	柴田 貴也	神河町立粟賀小学校	視聴覚・情報
5	濱田 理	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	
6	大窪 麻紀	百合学院中学・高等学校	国語（中学）
7	岩本 芳仁	神戸市立六甲アイランド高等学校	地歴・公民
8	藤川 綾香	兵庫県立加古川南高等学校	家庭科・福祉

同行者

	氏名	所属先・役職名
1	西 紀世美	JICA 兵庫 国際協力推進員
2	吉井 さやか	青年海外協力協会(JOCA)近畿支部 職員

「教師海外研修」（全体総括、データ整備、事前研修、海外プログラム準備、海外研修（同行ファシリテーター、研修管理調整）成果品作成、帰国報告）を実施するにあたり、その運営を円滑かつ効率的に進めることを目的として、当該業務の実施を青年海外協力協会近畿支部に委託した。

1-6 主要面会者リスト

	氏名	所属先名	役職名など
1	坂本 隆	JICA インドネシア事務所	所長
2	水野 隆		次長
3	坂根 宏治		主査
4	福田 千秋		ボランティア調整員
5	Erina Nakamura Saragih		ナショナル・スタッフ
6	Sulistyo Wardani		ナショナル・スタッフ
7	Mulyuno Lodji		ナショナル・スタッフ (NGO-desk)
8	福岡 誠行	生物学研究センター	JICA 専門家
9	小林 浩		JICA 専門家
10	Achmad Dinoto		プロジェクトマネージャー
11	近藤 信行	マルチメディア訓練センター	JICA 専門家
12	長谷川 裕子	ジョグジャカルタ デポック郡第5中学校	青年海外協力隊員 (理数科教師)
13	朝山 雄一郎	インドネシア国家警察 スマラン警察士官学校	青年海外協力隊員(柔道)
14	幸池 勇平	ジョグジャカルタ国立大学	青年海外協力隊員(料理)
15	滝沢 直美	ジョグジャカルタ 第4国立実業高校	青年海外協力隊員(料理)
16	神谷 菜津美	メダン観光専門学校	青年海外協力隊員(日本語教師)
17	安達 恵子	ジャワ島中部地震復旧復興支援 プロジェクト	一般短期ボランティア 看護師
18	京口 美穂		一般短期ボランティア 栄養士
19	浜元 聡子	京都大学東南アジア研究所 (ジョグジャカルタ特別州バントウル県ゲシアン村)	研究員
20	Anto	環境関連 CEP・BINA SWADAYA(NGO) PAHALA コミュニティーグループ	代表
21	Siang	バントウル県 SEKOLA LUAR BIASA 養護学校	職員